

櫻姫全傳曙草紙一

旅
185
!

185
1



於
183
/

序

嘗問內典因果二字包羅一

切衆生為狀體態空侯指

為姑徵諸男女之際夫唱婦

隨琴瑟在私終如恩德

比是好目緣福果必併後良

嘉治年月日

壽

明卷之一

矣乃王夫莫好妬嗜此五
情終始反目此是孽子因緣
禍早或及骨肉矣吁一念所
萌為福為禍如影隨形可不
慎哉如醒子所著楞姐有
傳寔是現王業鏡照出多

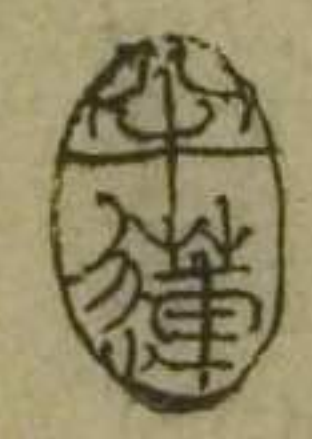
少可憫可悲之孽子目緣若夫
繫此孽子因緣者倘執以業
鏡照省反照勉修善根勉
除惡念刻念出如許苦海
而速以一場福地歎此編
一苟且看過芥醜之子索奈

題目錄所感而復之文化
乙丑晚秋半蓬道人書
於十才精舍



少可憫而悲之孽子目錄若夫
繫此孽子緣者倘執此業
鏡亦省及照勉修善招勉
除惡念刻忽出如許若海
而速以一場福地欲比編
一苟且看過芥醜之子索奈

題目錄所載而復之文化
 乙丑晚秋生達道人書
 於十才精舍



櫻姫全傳曙草紙

曙卷之一

例言

○此書何人の作るれを詳せむ。友人拜田泥牛子市小購得る所なり。曾木偶小舞一。歌舞妓小作。普兒女の耳目小あり。まね。養女櫻姫一期盛衰の事。正史實録に更あり。野史稗説といふもの。載る奇談あり。狂簡といふもの。往々實に兼因果輪廻無常轉變の理を示し。遅速のありとも。善惡の頭つひ報のれ事を録せり。より。虚談のもの。兒女勸懲の一端。ともあるべし。聊たのむ。書肆の需小應。補綴し。手へぬ。○原本のむさぶ。俗文といへども。上代の言。以て記し。頗雅あり。されど其俚小寫。俗耳小遠を厭。今更。鼻言。用



且一向児女の聴を喜しゆんと欲し。形容潤色不過をれ言成
くりしれれば記事の體と失ふのより自然雜劇本の文体と脱
西鶴門左衛門自笑其磧等が糟粕を嘗不似し。殊更魯魚
の諺假字の差と人のうゝあざれば識者の訾詆不官しとておほく
ふれ

繪成くりみぬの児女の目を慰且文のわざ得たり趣成示と
あり。これも時代の言様成考し畫べた事なりとも無下り
人の風俗小今古の差ぬ成辨されば烏帽子著られ船人袴
著る馬士も成画バツリと怪まん。依くもべての物目馴る
畫小画し故小画中居室人品より衣服器物に至り古より
海成わり画し時成繪と大小差りこれ画者の意ぬとて

曙巻之一

唯通俗を專と。止る成得ざるの業あり

目馴る様を画うちゆ。梓観に建保職人歌合の圖成摸。常照
坊の竹笈の法然上人行狀繪卷物の圖を摸せり。いひ間ありて
古今混雜せり繪難坊の訛を若何せむ

案少といへり下の文の予が考あり本文といへども原本の大路
成過の。小徑の如し總て予が補文あり此書を曙草紙と名づるは
櫻姫の傳奇まれに藏玉抄小櫻の異名成曙草といふ小とひよ
うとるいひあり

醒く齋主人識



文化二年乙丑秋九月

引用書目

○事林廣記

○丹波志

○大系圖

○異本源平盛衰記

○義經記

○東鑑

○山州名跡志

○長門本平家物語

○姓氏錄

○徒然草

○說文

○玉造小町

○宇治拾遺

○文德實錄

○三教指歸

○九相詩

○法然上人行狀繪詞

○蘆分船 難波名所記

○二人比丘尼 石平道人著

○明月記

○唐陳玄祐離魂記

○正燈錄

○無門關

○剪燈新話

○豔異編

○夏子益奇疾方

○萬病回春

○奈良晒

○南都名所記

○大和案内記

以上三十部

明卷之...

曙草紙總目錄

卷之一

- 一 彌陀二郎 網得佛像
- 二 鷲尾義治 惑溺玉琴
- 三 野分方 嫉妬害玉琴

卷之二

- 四 玉琴魂還著胎子
- 五 轎裏遺書公連償鼻
- 六 野分方 季春誕櫻姬
- 七 清水玄眷意櫻姬
- 八 退去清水玄落魄

卷之三

- 九 唾蝦蟇小蛇會兩士
- 十 櫻姬慕宗雄 一卧病
- 十一 夜襲第勝固亡義治
- 十二 蝦蟇九傳帶取池記

卷之四

- 十三 盲女小萩曲死雪中
- 十四 二人比五尼發心記
- 十五 櫻姬悲薄命二卧病
- 十六 櫻姬魁生清玄枉死

卷之五

〇

十七	鷺尾家士復故君雙
十八	櫻姫 魘妖氣 三卧病
十九	櫻姫 離魂化 為骸骨
二十	櫻塚 楊貴妃 櫻來由

以上 目錄終

櫻姫全傳曙草紙卷之一

江戸 山東京傳補綴

第一 彌陀二郎 綱得佛像

事林廣記云善不善報あり悪不善報あり善悪報あるも時節いまだ
 到らざるあり深耕浅種尚天災あり己と利一人瓜損ど豈果報あるんや
 麻を種と麻を得豆瓜種と豆を得天網恢々として疎わらず漏さざ
 善悪若報あるんば乾坤も必私ありとて此語宜哉昔より兒女の耳小
 りて清水寺の清源養女櫻姫を執愛し死に怨魂姫をなせし心裁の
 物語を考ゆに因果靚面乃理彰くく毛髪いよる一葉あり美の
 人皇八十二代の帝後鳥羽院の御宇小あらしり丹波國栗田郡小鷺尾

十郎左衛門平義治といふ人ありたり志温和ゆくと武備の業も更
かり文事の道も暗くも家士郎等あまも召つゝ山林田庄おほ
持て財宝山とあり家富采ゆき人皆粟田の長者とよびて尊敬せらる
ありたり丹波志此十郎左衛門義治ハ人皇五代桓武天皇十三代の
後胤鷲尾三郎經春の嫡子あり大系父經春公去る壽永年中九郎判官
義經公平家追討の爲攝州一の谷鶴越と落し多し一時召承下山路乃
業内あいないひてそれより後まづ軍功をわたりつゝいふ義經の愛臣と
あり盛衰記其後義經公舎兄右大将の憤責ふ逢ふ此彼瓜へりて
わりたつゝいふ奥州小下り秀衡をたのこのふ其の職も經春相をうて
彼所あそこ小下りりや文治元年四月晦日東鑑義經衣川の館にて自害ありし
時經春も討死とありたりるるもいふ子息十郎左衛門義治此事と

剛く深く悲し丹波よりくるる陸奥ふらり父の體體とそんごころり
飯園一募送ぬいとも累七平咲の設齋追薦ふ餘多の名僧公請に
諸天あまた不供養くはらなりとてその靈魂れいこんと祭りたりとてこゝへ扱おれ爰こゝ又
十郎左衛門義治の部等小真野水次郎といふ者あり其父ハ江州真野乃
産うぶゆく兵衛貞次といひ義治の父鷲尾三郎不仕つかと忠臣無二の武夫
ありたるが戦場小たたくる軍功をわたり倍臣といふも九郎判官殿の
感賞かんしょうおのぐり車くるまやわたりたり扱あつか此貞次一子かた事ことあがた夫婦佛神
小祈いのりもつゝいふ一男子公誕うたり其兒八月十五夜よ不な生まり六月
水陰すいゐんの精せいあると云く水次郎と名づき置とるや此水次郎成長ふとて
大膽たいたん強氣きやうきゆき力量人りきやうみ越こ邪見よみ放逸はういつあり更さら不憐あはれの思おもひ常つねハ
山川さんせん小奔走せうほんそうとて持漁もちりしを樂たのむとて一向いひの行ゆひ悪あくりけとて人皆



曙卷之十一

鷺尾十郎
 左衛門
 義治内室
 野分の方
 と酒宴と
 催して樂
 なまらむ



異名公はけりて悪次郎とぞ稱じたる父貞次これと愁ひく度ぐ異見
 をとらるるといふものらひざれば且怒且悲夫婦唯是のこを苦みや
 のうらじぬらるる不鷹鳥尾三郎奥洲衣川中討死せしと父貞次秘傷の
 餘りたらし陸奥小下り二郎討死の所小のらりてつひに殉死公とあり
 ころりぬ誠長とてひまもある忠臣かりこれに依り義治貞次が忠死を
 憐れ其子水次郎も高禄を多へ真野水次郎春次と名告して召仕つと
 ころり水次郎も殺生とのに常れ業とてころりあざど大酒と好む大カ
 小ころりやもそれな争論と惹出して人を打とてあふとむひの悪業ももく
 つのりりぬれこのことをあしむ者かほく義治小告と討て死とてむじとる
 義治彼が性質とてころり悪行をあらとていとも元来無欲ありと名利公
 貪る心あられば能教誨とてころり後く其行もあやむとて心と長

萬とあらびとぞ召つたりとてこれ全貞次が生前の忠義が思ひ其子と
 憐むるあれどころりさくゆりころり水次郎の時丹後國九世戸の文珠堂小
 参詣一殺生禁断の場小にぐる網とてころり貞次らりたれば浦人これと
 見つけ制ころり公憤り尺く打倒しおほく舛とおおせとて立去りたり
 浦人とも彼丹波國桑田の良者の郎等なりとすおひく鷹鳥尾の館小
 来りて水次郎が狼籍の子細あらうとてころりあざど義治とれば父一ツの朝廷
 のまことえとてころり二つあり依怙の沙汰小おとむらとていひくせんくこ
 あく水次郎が家財を没収し國のさくひに追拂またりかて水次郎俄に
 浪の舟とてころり杖と失ひて警者鞭ふとてあらう水母の思ひてころり
 木蔭と雨りり牙公かくとて死所もあられば山城國淀のわたり一はとて
 可小臆といふとてころりの小家と造りて住異名と実名とてころり悪次郎

と名吉ありりひもあられ日來好は漢が業とてと貪しくくじりたるが
 めの時頭陀の沙汰あり度此村未と黒谷の専修念仏と唱へ
 人の門くふきとてそ手の裏とて次郎ありて彼僧未と心漁
 獵あり網の裏魚をふと大ありりひの妨とあり若又未と打擲
 して再來とてさやふかともふとと思居るふつとる日かの僧又あり
 といふとくればやぐとて錫杖と鉦とらひとり炒火の裏に鉄箸
 とさしりてとて火とあり額小印して放飯してふの僧痛むとぬんを
 怒まる色もあく只悠とてとて去りれば次郎大に怪と跡と慕行と其
 在所を窺とて不思議哉かの僧淀川の水上を歩と陸と行とて
 西小ひひと去りぬ次郎またと怪とありとてゆふ西山粟生野の
 光明寺といふ寺へ入りて忽とてとてかぬ次郎其まこの人母就と

ちうぐの頭陀の僧此寺中へありやと尋ふとの人答て當寺小頭陀の
 僧あり但本尊の釋迦佛時と頭陀の僧小現とてむと結縁の人は
 傳説とれども親とて若とてと語る次郎ゆとてとて入りて
 本尊を拜とて額小火印の痕ありと頻小血を流しぬ御鉢の釈迦と号せり
 次郎親く此奇特とてとて佛法の不可思議あること公會得て深く
 懺悔の心を生とてとてその悪業をぬたんと自心小誓感涙を流し
 つ家小取りたるがかの時うがひとて錫杖と鉦とをの儀ありとて
 とらふ常照といふ二字と銜つけぬ正是仏の光明十方世界を常照し
 るといふこととて示すといふとてとて奇異のありとてとて
 其夜の夢小容貌端麗の僧來りて告て曰汝機已小熟と感應のり今夜
 網ととてとて淀の神の木小到るべし必有縁の知識小遇べしと告るべし



彌陀二郎
真野
水次郎と
丹後國切戸の時
文珠おまうで
こめく
根籍とほ
浦人打とこたふ

切戸文珠

えく 忽醒ぬ次郎 歡喜の思ひとあり 小船ふ蒿とて 小到るふ此時
己小三更のころやひあり 四方暗くする 水面亦赫奕する 光明迸て恰
日の出るが如くあれが 感悦うまうあり 其光のうら小細かるとあひびきける
紫摩黄金とわがれ 弥陀のそる像細ふりりてのむらむつり次郎とれと
捧げをりて 家小敢り 香花を供へ 念仏を唱へこれより 菩提心頻小歎欣
の思ひ決定し 遂小殺生の作業と止し 唯頭と刺さる 出家のあはれ 行ひ
りれ 時の人これより 悪次郎とつとむ 改り 弥陀次郎とよびふりりかて
次郎發願とて 一ツあり 亡君亡父追福のため 二ツあり 諸人結縁のため
三ツあり かのと 罪障消滅のため 諸國をめぐり 諸人を勸化し 一座乃
仏堂を造営し かの靈仏と安置し なるべし 頗小おのひ 五ツの笈と造り
る像なりとて ありて 一と 負か 錫杖と 鉦の 一と ありの ありの ありと

そんごんまが 山陰山陽の國にぬめぐんととて ありて 出まぬ此時
らと 建久元年の冬の ぼあむのりりり 誠是 逆則 是順の 理ふとて
悪ふつらん者へ 又善あむつとて 一と あり 常言も 此弥陀次郎がとて
かろりり 己上山崩名跡志所 記と大同小異あり

第二 鷺尾義治 感溺玉琴

爰ふ 又鷺尾十郎左衛門 妻と野分とあり 此年二十歳あり
夕れが 誠小絶世の 美人なり 翠黛紅顔の 粧花より あり 不韻玉簪
照月の姿あり 耀ぐりあり 容貌の 美麗あり のとあり 正聰明
伶俐人 丹とて 女の 嗜むる 諸道に通じ 武士の家小 養育し 女と
いふも 少く 武藝とも 心かぐべし ことならり 歌学系竹の 遊び
のひま ちやちや 太刀の あり 業あり 學あり ありの 男子あり あり

まゝこれに平段あり此婦人の出生は尋ねば櫻町中納言成範卿
盛衰記の落胤あり成範卿下野國室の八嶋小流されりひし時賤女
平家物語記
契りしひし其女の腹小宿り御飯洛の後出生しる女子なり十歳の
頃まづの農家の貧乏小育らば艱難ふるせしが鷺尾三郎偶此
子とて貴族の胤といひ美麗ある生きたるべしとて養女とし成人
のらしき義治小めありたりこれ腹こそかたりと卑くと正是名
比翼連理のかゝり階老同穴の契あさくも豊と愛月と弄おほひも
このことそのおせどつひとはあつりといふも宿世の定りあやめんい
世嗣公まうけどこれの愁のつあまば神お祈し願とのでもあり小駿
あゝ義治とれすむら一妻ともあやど打さるるがかくていひづこの時う一子と
まうくこれのちあらば不孝の算とてけいへんを妻と名はふふとて頃日
京都より一個の美女とよびくばて腹心の家士篠村八郎といふ者小あづも
れが家のおく小新室と造り召仕はげふと物毎うしとてあれたぬ
ことと義治遠慮深れ氣質あるは野分の方のおりくをともり當分
此事沙汰さるるどとて八郎が口はなごめ深くかくこれが家士
郎等あもさるふとれと知ざりたり梓ひ女廣き都のうらあもなびあん
白拍子あり姿といひ業といひの祇王祇女佛あどあもあさく物さ
ざれは名祇福といふははは大政入道在世の時ありせむとてる宛あつらん
あどのひく六波羅様を好む若人等おほく恋慕されが此度義治を
贖まて當國ふらりつらり年十六歳あどありぬ歌舞吹彈の業を
よくせしうちあもいなく琴の妙手あり鳥舞魚躍の術ありかの俊

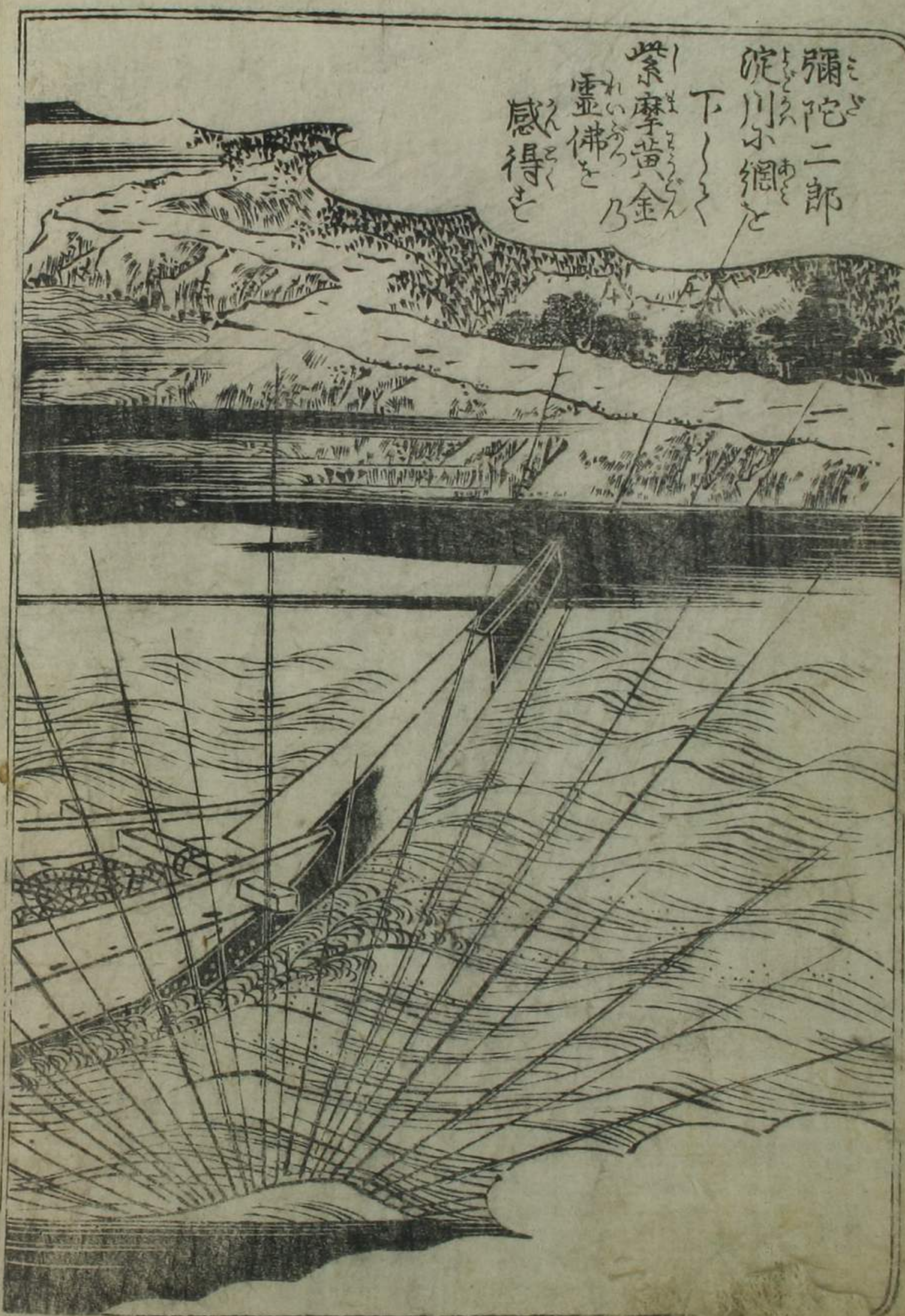
まゝこれに平段あり此婦人の出生は尋ねば櫻町中納言成範卿
盛衰記の落胤あり成範卿下野國室の八嶋小流されりひし時賤女
平家物語記
契りしひし其女の腹小宿り御飯洛の後出生しる女子なり十歳の
頃まづの農家の貧乏小育らば艱難ふるせしが鷺尾三郎偶此
子とて貴族の胤といひ美麗ある生きたるべしとて養女とし成人
のらしき義治小めありたりこれ腹こそかたりと卑くと正是名
比翼連理のかゝり階老同穴の契あさくも豊と愛月と弄おほひも
このことそのおせどつひとはあつりといふも宿世の定りあやめんい
世嗣公まうけどこれの愁のつあまば神お祈し願とのでもあり小駿
あゝ義治とれすむら一妻ともあやど打さるるがかくていひづこの時う一子と



彌陀二部頭陀乃
 僧あまの 鐵てつ 著しやく と
 乃の 化け 身しん
 光明寺の釈迦佛
 乃の 化け 身しん

そなたのびもつうまらうめ相公このとて彼ん不か瀨れりや且も御家の為めあり
ららんよ折さりた折さりたのひ御ご諫言ごんげんのせりあどかきうぐせりりる
野分のりたの方さとれん女きの正まし我わがのとははる者ものもおぼえどはる
ま西さいのゆがいの者ものも哉や玉琴たまがねとやんぐの我わがとくより知しるといふ路みちを
も相公このと恨うらまらふは我わが辛くるひごとくつとひまわるといふも
果報くわいつとあきく今いま予よがもうけざし兼あて妻よめ召めは玉たまらんを止めし
世嗣よせのよせ思おもひ居ゐる折さりた幸さいあどや民たみ百姓ひやくしやうとて妻よめ
召めはつたのうらひかりまらう相公このの當國とうこくの長者ちやうじやうと敬うやまへ御ご身みあれ
寵愛ちゆうあいの女に餘多あまありとも何なんの憚はげりもふとこのべたや畢ひ竟ま遠慮えんりょ深ふかは
御ご家け實まことあり我わがおらんぞ所ところは憚はげりもふとわが女に若わか世嗣よせの産うま
一家いっか中の悦よろこびのうやの腹はらへ素もとよりかりのるまは其その子こハ則すなはち我わが実まこと子こも

同前どうぜんのいさ隔へだち心こころあらん我われ唯ただ安産あんざんの祈いのれあり又また保たもつ御ご家け
の為ためのうらんあど女に等らがにうらひのべたや女にあうと恩顧おんこの老臣らうしん餘多あま
のまばたき相公このの誤あやまりもつと女に等らが言ことはまらんや女に等らが所ところハ
我われ思おもふ似にくうらう邪道よちやういざあありかろあはれ心こころのりして
我われおはんと思おもふべしどか女に若わかの女におはる我われ心こころ小こ嫉妬しやくとあり
わらどわのららんといふと女に等らが言ことはまらんや女に等らが後あと彼女かのの言ことはまらんや
そらふ眾しゆなるも人ひとども思おもふ者ものも哉やとつとわらう
奥おくの殿との入いりたる侍しやう女にの恥ち入いる面おもてを紅べにいろしうくれ思おもふ則すなちハ又
格別かくべつとよまらんゆしよく不ふ真まことありぬ誠まこと小こ君きみの賢けん女にあはれ
大おほい感かんどくかのが房はやくお退ちゆうざいさ此この後あとは言ことはまらんや女に等らが
唯ただ其その賢けんある志こころざしの密ひそか語かたりのひく感かん歎たんたり扱あ其その頃ころ木曾きぞうの残のこり



平家の餘類深山幽谷ふる住く民の災おほりけるが其類おや當
 あも幼女を奪かへた人の妻とま盗取く遠國おつろ一妾婢或
 遊女お賣賊のり百姓等これが為お苦いけま義治安くと思ひ捕盜
 の武士お命し捕へむしふやめて四人の賊を捕率て来りぬ弓絃賣高野
 法師板金剛賣算者あま姿をゆせてる賊どもかりまがやうらと
 あらうらるるお世固く懐中おちいせん蝦蟇のひわびるるお持りよく
 えれば常の蝦蟇と異あく二三寸むりの尾ありこの何の為お持
 ると弘明さるお其のまおいそど拷答と正しく拷掠するよ苦痛お
 堪どや算者お打扮る賊云やこれ鬼界嶋お生る長尾蝦蟇と
 そのおく漢名お溪狗とよはしうけまらりぬ嶋の山中
 溪洞の裏お生むるの他おれたるる物お我輩の仲間
 餘多あつて諸困おかき住互お相たすのく人お賣買するふる面おん
 知らざれば此蝦蟇お證する事お便だ故お我輩が隠語お蝦蟇つろし
 正侍づらとよむ其餘の者ども口おせとちり彼がやまも少もたひひおど
 とのひらねまが獄舎おつろりおため扱此四人の賊のうら弓絃賣お打檢
 するあまの賊おあまど名お蝦蟇九といひ力量とと武義お達し
 多く容易捉るべ者あまねど此時疫癘おやまらうら瘦かたらへ力
 めけくまらねがとさゆ多やうくと捉まぬ後白河院の御宇西海お海賊
 蜂起し人民おあはしるを鷲尾太郎維綱征伐し其軍功およりや
 右衛門尉お仕むれ是乃十郎左馬義治の曾祖父から彼蝦蟇九其
 海賊の張本木冠者利元お子ありされ鷲尾の家お父の仇おまら當主
 義治お打恨をとりんとかの婦女と奪盜人のうらおまらりて當家と

うらひるが天命を捕まてり蝦蟇丸獄舎ふあり思ひくろ我病
よらく身体自由あざむくやもとちも仇家小捉まらるる
誠小運のつゝあれゆゑあざむくやもとちも仇家小捉まらるる
ひくんとさあぐ思量しるる日敷へやや力つたる瓜がえけむ
まぐ心中小喜び折なうらひ居るる一夜風雨をぐ守りの者も急
くちぶらぶら瓜幸ひ三人の賊瓜そくちめ殺し獄舎破り逃失
翌朝と瓜知らく大不尋な四方小追人瓜走らるるつひ小行方
あらぬしりこせんさぶなく三人の賊瓜のつらぐてく罪小行ひく衆小示
くられしり困中賊の愁と忘れし百姓等あびのりかそ此年もく
建久二年の春のすふありぬ野分の方つぎ瓜慰る為庭瓜けら
くくくちあえり前裁も一ち不趣まらるる一日折戸ちくちあえり居るる
松の梢小鳥ありく何やん地とくおじさるる瓜んまむ蛙やうの虫あり
のくくちあえりやと香箸とらりく庭ふとりとらぬののさくくくくく
んまむせり尾あり蝦蟇中尋上吊の物小あり野分の方思ふ共年
蝦蟇つゝとちんい盗人と捉へりさるる箇く懐中小尾あり蝦蟇と
持し侍女等が伽むさるるぬあつて瓜げぬあつて必其物ある後園
小埋さるるすまが頃日乃庭まじりふかこの土瓜塚へは物の
のくくちあえり瓜鳥のそり来はるる疑るるくくくくく此物我手
ぬのりく密討なやとさるるまき時乃いささあらと心ふりな
げたあれが折しもさるる人かた瓜幸ひいそぐん一香榎乃
うらふいれくゆくくくちあえり野分の方胸中いささ計りあれ
下回瓜讀得く知る

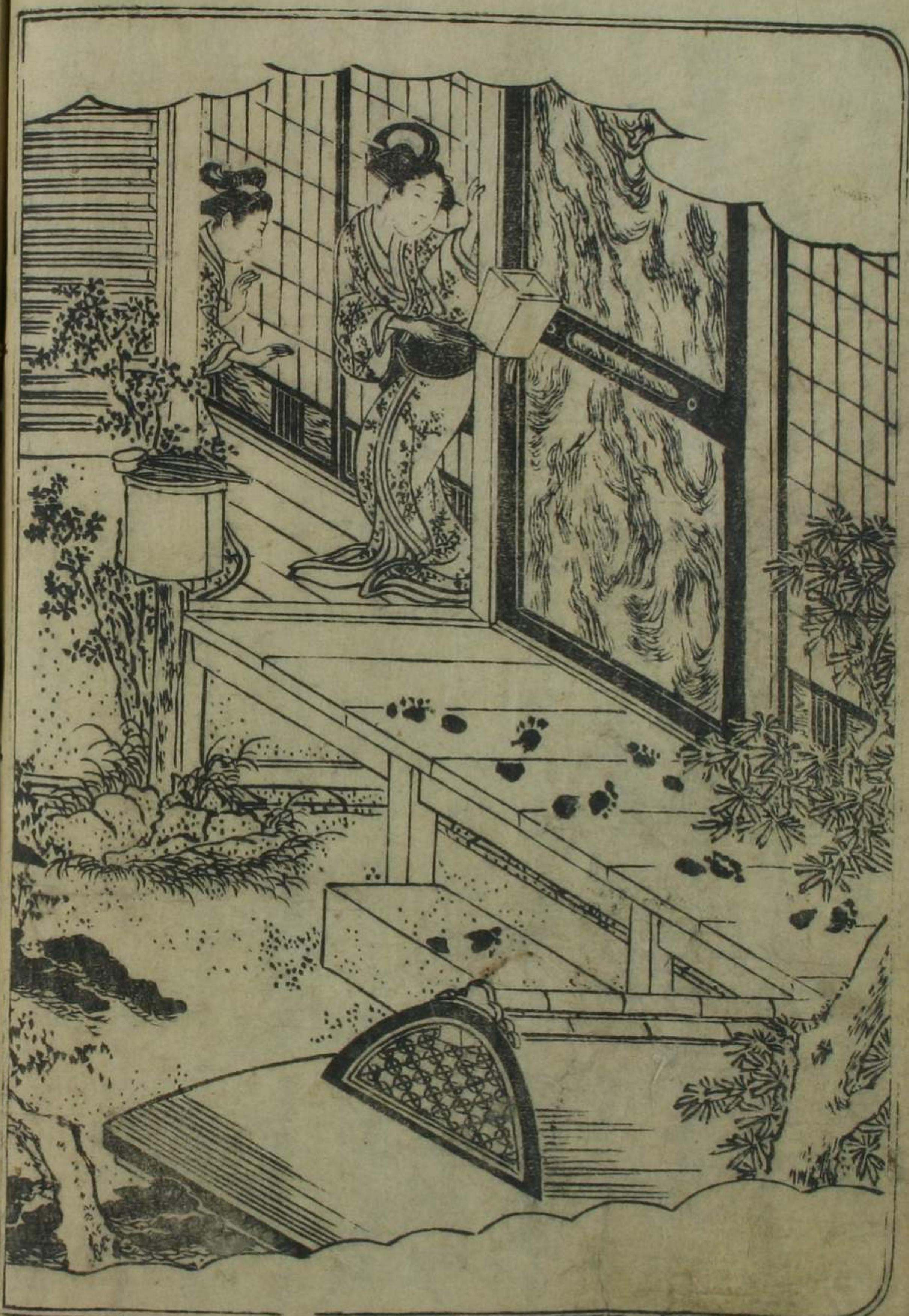
第三

野分方嫉妒害玉琴

義治の家士のうち兵藤太といふ者あり生得非義好に貪欲深く
 財宝をばんと蠅の血をばんとく一命を失ふことなると室の爲むを
 顧ざるほどの悪性の者あり野分の方兼て心中小たくこかりかこと
 のまへ彼が性質とよくしめおかれぬとす頃日義治朝廷に貢ぎたる爲
 京都より一田主ある幸ひ野分の方の兵藤太は奥深に坐敷に
 召出され声ひききあへていひく我は藤太は性とて人のまじり密に
 つまねこのまじり速にけがひて人々のまじりやとまじり
 へに當座の賞とて金子一百兩を与へる相公の所とては後日
 立身かといふとべへおけり極密の大事ありて汝が誓言を口をすされば語り
 ごとく兵藤太は二百兩の賞金とすまじり心中小なきがとて外に

おたると刀の筭をとり来りていひされ密事とのまじりけがひてなせ
 されども才不肖の拙者も大事なうらめひ命をばんとすまじり身も
 本望の至りおけり水火の裏小つりいひて苦痛なうらめ事なりとも
 いそぐらゝいひて心おけり御物語より素他小のまじりごとく
 むんたといひてもいひまじり武士の金打られん見おへて筭をとりてちや
 と打合へる野分の方おけり其一言をきく疑ふべぬ守委語り
 ばとていひて藤太よりよせ汝の玉琴が身知つらん我彼を奪取
 せむれば極わり汝のその夜篠村八郎が屋敷小のび入りてとていひ
 彼は盗来とて我に此坐敷小のり相待べとていひて兵藤太
 らめ野分の方の本心はうら驚くといひて崩後と顧ざる者あるべ
 速にけがひていひて安ん事ゆいひて御氣づくひのまじりごとく

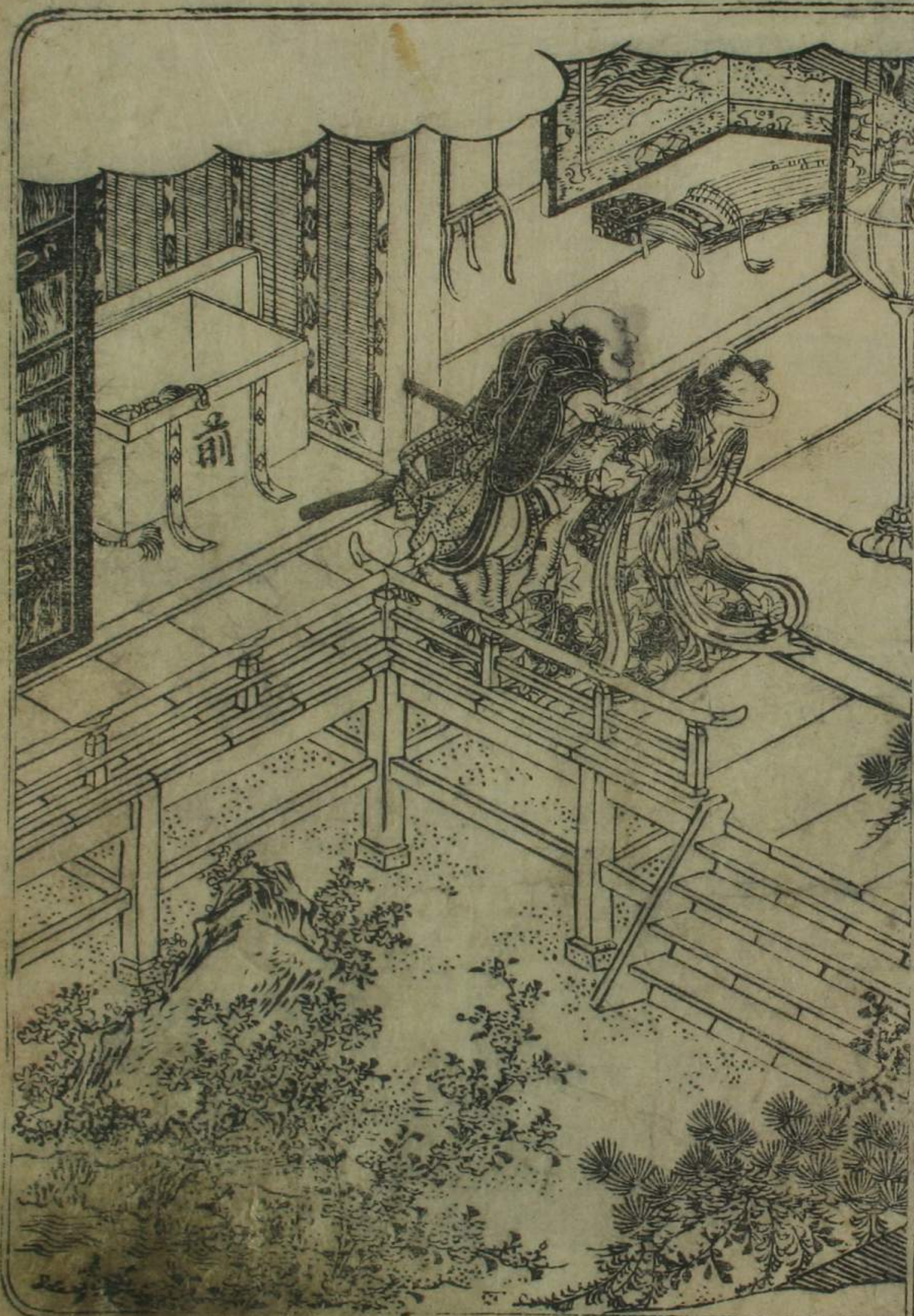
鷲尾の家士
 兵藤大篠村
 八郎が家お
 りて玉琴
 と
 うがひ
 とれ



こゝもあつたふらけがひらねが野分の方懐より香箱ぬこり知りの蝦蟇
ころく兵藤太小渡いこく此物去年婦女が奪ふ盗人等證の爲
こゝ持し物あつたころく我も小入りへ天のあつたあつた女がうら
たつたあつたふ此物落し置て立去べしこゝの盗人等が種類の仕
業とおのらせ後の疑はうけまかれ計かりまがけゆへに汝一人わく行ふべし
かゝるまじも別小入ぬこりまがけを藤村八郎の老人といへども勇氣をこ
ました者より伴次郎公光も幼年あつたも武藝不達せりとまがけ
えく車ぬあつたまがけまがけまがけまがけまがけまがけまがけまがけまがけ
いらくうけまがけまがけまがけまがけまがけまがけまがけまがけまがけ
えく唯の夜の夜待侘たりまがけまがけまがけまがけまがけまがけまがけ
似ど折しも雨盛る風まがけまがけまがけまがけまがけまがけまがけまがけ

兵藤太よん幸ひと悦び笠の下小覆面頭巾ぬ着て面鏡に鑑唐櫃を
負道ぬ急ぐ藤村が屋敷不到前後の門ぬうらまがけ嚴鎖して
まのびつづた便りあつた後門のまがけまがけまがけまがけまがけまがけ
まがけ便宜ぬうらまがけまがけ時一人の老翁一荷の擔ぬかき蓑笠雨ぬ
まのぬ濁膠めまがけまがけまがけまがけまがけまがけまがけまがけまがけ
まがけ頭とまがけ酒をかりんと叫ぶるあつた老翁まがけまがけまがけまがけ
まがけ声高くまがけまがけまがけまがけまがけまがけまがけまがけまがけ
まがけ聲あつたまがけ口小言のまがけまがけまがけまがけまがけまがけまがけ
まがけ追うけまがけ兵藤太物蔭よりまがけまがけまがけまがけまがけまがけ
まがけ門内まがけのび入れ門番これぬ知れど酒ぬ買をりまがけ再門ぬまがけ
まがけまがけ兵藤太へ庭でまがけまがけまがけまがけまがけまがけまがけ

めい 名よせしるも実ハ一曲瓜望為かり 何れも一年とくくつてんや
いざくとも琴瓜前ふさつつけく望くれば玉琴ハ水責ク責よめ
しりもあは苦く胸もどろく折あるいさく琴瓜らふべんさ
とくこれさのまぶらうる憂目かありんもくうきも畢竟城が
ゆゑ我と捕へくつた目つせあめと思へ何れも彼方の知ふとむ
憐さうけく此場瓜のうらふ志はと心瓜さめ涙さあうらひひる
拙死瓜音とせせあせんいつとくはらきと命かりりまぶらうる
もゆとまめり 手業の知ハゆさせあうといひあう 琴瓜引しせ
かれあり唐の代乃名城翠翹やうらうらうら 薄命といふ曲瓜日本詠
和げくゆもあられぬ唱午頭もあうきもはさきとさくが妙午升
あまぶらうらうらあうらうら 其声凄風楚雨のごとくすあられぬ
催きといひ野分の方ハあ城の心やまめ初弾トあうらうらげき
野分の方つてく実ハ奇妙の上午あり次女といひ業といひまらたひ
あまぶらうら相公の深く愛させあめらうらむはけり相公と年ひさく
とひさうらせく 鶯鳳の鏡小影とあう 鶯鶯の被ハ枕瓜とせしうら
あうらうらうら瓜瓜召下しあひうらうら 俄ふとあうらうら 頃日ハとく対面
とあうらうら皆是瓜所為りうらや 瓜閨中のさめとあめささな
けり瓜めくといひあう 笑種ふあうらうら 彼といひ是といひねじあじと
思ふ瓜の宇治の川浪うめあうら 貴船の針も我胸ハ打思ひし
胸ハなく火の顔ハ出引提の水もつてあうらうら 涌え瓜人
あうらうら 堪力心とくこれうらうら かく世の苦さうらうら
思ふ瓜此眼瓜うらうらあうら 瓜胸瓜さる肝瓜うらうらあうら



野分方姫かろ
兵藤大お
命
玉琴を
捉へ
し



曙卷之一

のげのま 苦しや堪がらや此館小 哀悲ある人のおのまをあらまき命ととらひ
 こまへと 色高くより色ど 草木も 眠れ 丑三の頃といひらく 間と 隔深殿
 ろまふ 誰とてあつる者もあつ折しもつらね 夜嵐の庭木とあつとこのころり
 くらり 無慙や玉琴の手は 負く 總身の朱小 深るがうとひまらうり 一度の野分
 の方小 びらひ 一度の兵藤太小 びらひ 掌は合しとと 返の命はのべまのまこと
 願へど 野分の方へ 答もせど 只うらけしひてとらうよ げ小 中りられが今
 ちとらうく 苦痛とさせよと 目は以てとらうふど 兵藤太その意は こそり
 玉琴が 多りくびつらうく 刀はとらる 匣 胸の上小 せやくと おのまは 玉琴の
 苦し 息とつたさへいふも 殺し せらり 殺さばとて 殺せし 物の報ち
 のりりあれたものう 生うり 死うり 六道 追生 小 怨は 返りひとらうく せが
 べとらうく 色も せらり 小 ぬめられれば 野分の方へ 返りし せし 命

ぞらあぞ 兵藤太とらうく び刀はとらる 匣 玉琴が 吐小 せとつたと 返り
 けし 血 小 さと せらり 手足とら 牙とら 断末 摩乃 苦目を
 あくられぬめりさゆの 時小 怪や 今 せらり 灯火は 小 あり
 かり 玉琴が たりある 黒髪とら 夢のころり 良ありて 心つた
 蛇と 野分の方へ 小 びらひ 養たり 膽太 野分の方へ 小 びらひ
 眼は びらけ 黒髪も 灯火も ありの 如し 兵藤太 雨は 見えたり あり
 嗚呼 哀哉 嗚呼 痛哉 玉琴は 十七 歳 一期 黄泉の 鬼とら 畢ぬ
 野分の方へ 命とらる 此女の 後日 命 義 嚴く 屍 土中 埋
 埋る せら 万一の ころり 大江山 小 負行 赤裸とら
 面の 皮は びらけ 谷川 深き 雨 小 せら けし 衣服 小 目 せら あり

鎧櫃の血つたより皆彼所へ焼失ふべし事と全くはさるるが再来りて
 告よ我るは安心とてさぞ夜のわけぬらふとてせよ兼て約しよとて
 賞金入てふあつてとて一袋の金を出しせりれが貪欲深死兵藤太
 とどろふおび手むや屍櫃におかして負後門より出く大江山へ急の
 行ぬ野分の方の縁されおちて後見送り何せん心おちるつれづれが
 此時已小雨や風もまら千早山乃月霞のうふとて陰うとて
 けろぬちめあな艶なる景色哉朧月夜おちく物ごあらととみも
 うべまりと獨語くおちのたるとめるもくの人おあつて誠は大膽
 不敵の女子ありたりかくく兵藤太の月の光りおちて空を走らうとて
 ゆれと彼山おつて玉琴が屍櫃知く衣服とて死面の皮おむさおし
 乃石とらうらうら谷川おちるめ衣服も櫃も焼とてわとてわとて

とりりまらふ又馳取く彼深殿おつた野分の方のりとのとて待
 着ら兵藤太頭おちげおせけしほとわうつら念今くさうひゆと
 野分の方おちひとせら早うじぞい約せとてら當座の賞金と
 こもとて錦の袋おひきとる二百兩の金子おちつた兵藤太お
 戴ささうの功おひく莫大の恩賞おちつたあつてかてけら
 まらおおびえけつとて満面おちるおちる懐お収め野分乃
 方おちひとておち大夫の魂とておちるおちる大事おちつて
 とりのくや夜明お間もあつてとてとて休息せよとていとまおちつた
 兵藤太の恭礼とて飛行く縁とてとてとて所おちひうけつた
 背後より野分の方長刀とておちつた兵藤太が右の脇の下おちつた
 かけられ呀と一色おちつたおちつたおちつた長刀おちつたおちつた



明
卷
之
一



野分の方
後目密計の
のりまんこと
かこれ計り
兵藤太と
殺と

十五

ころたかし飛とびかりりともこまれば首くびの前まへあどかりりる野分のりたの方かたまより
 手て小鮮血せんちゆうをささる首くびを提長ていぢやう刀たう小脇せうわきおかしとささる庭にわふささる飛石とびいしを
 つまむ寝殿しんでんふらぶれやうく盗人ぬすびとのりりる侍宿じやうしゆくの者ものもとく来きま
 きささるやふ叫よびりなれいささる侍女じやうによう等らもあひくお目めを醒さす大駭たうがい動どう
 盗人ぬすびとの我打われうちどりの灯火てんぱこれといふ侍女じやうによう等ら手燭てんそくとさし出でせ野分のりた乃
 方斬首かたざんしゆうなてじりささる驚おどろる侍女じやうによう他たより忍入しのびいりる賊ぞくなりと
 おりひふこれのまき兵藤太ひやうとうだいあめどや我わがひら目めを汝等なんぢらよくりんと
 つふ侍女じやうによう等らとらぶる眼見のぞきといふも兵藤太ひやうとうだいお怒いかりあひさしとけ時とき
 侍宿じやうしゆくの武士ぶし等らおこさじせふいせめつりめ野分のりたの方かた怒いかれ侍じやうとば家いへに
 亂みだりあつらんらんかおんざりた此者このもの當家とうけの祿ろくをささる露つゆをりりも不ふ足あら

のりたれふ何なにも盗人ぬすびととさや我わが小嚴せうげんかうれ奥坐おくざ敷しきおくれりりる
 彼所かのところや打うちりめ汝等なんぢら彼所かのところへ行いく軀からだをあつめんと命いのちト
 くれ侍宿じやうしゆくの武士ぶし等ら彼所かのところへたつ兵藤太ひやうとうだい懐中くわいちゆうの金袋かねふくとさつは
 持来もつりりる野分のりたの方かたこれを見みてこれの我手わがてまつりの用金もちかねあら
 らう相公そうこう別館べつくわんふのくおのとゆゑ上かみ籠かごの用心よこころおのづから急いそあつんと悔あやり
 思入おもひいりる疑うたがひは不忠ふちゆう不義ふぎの奴才やつらとさよやれ俄い母湯ははゆをひた衣服いふく
 と著きるささる寝間ねまふりめ扱あつて夜よめつれば兵藤太ひやうとうだい
 屍まがひととりと皆みなく評議ひやうぎしをりる君きみあふ兼かねく剣術けんじゆつとさびあひ
 めさども事こと小臨せうりんくささるの御手ごてあつとわんとお思おもはさる羅綺らぎあつ
 堪たざる御姿ごすがたあつ此度このたびのごとれささる一ひとあふ誠まことお奇うけ婦人ふじんさ
 女中にようぢゆうの丈夫とやうぶとさよとさきと感かんじり其その隱悪いんあくお知しる者もの二人ふたりあつら

たりかよふ小漢の呂皇后戚夫人（ふじん）の苦（くるしみ）一（ひと）を（を）みも（も）ころ（ころ）ふ（ふ）ら（ら）ふ（ふ）
 まう（まう）と（と）ま（ま）れ（れ）暴悪（ぼうあく）なり彼婦人（かへん）に似（に）ど（ど）巧（たくま）小密謀（せうみつぼう）を（を）し（し）人（ひと）の（の）れ（れ）ぬ（ぬ）
 知（し）ら（ら）ず（ず）と（と）い（い）ふ（ふ）の（の）湛（たん）と（と）ま（ま）れ（れ）青天（せいけん）欺（あざむ）む（む）と（と）ま（ま）ふ（ふ）の（の）つ（つ）つ（つ）ひ（ひ）ぬ（ぬ）
 天罪（てんざい）ぬ（ぬ）ら（ら）ず（ず）あり（あり）身（み）俸（ほう）微塵（ゑじん）ふ（ふ）ら（ら）ず（ず）け（け）ら（ら）ず（ず）死（し）に（に）ま（ま）ら（ら）ぬ（ぬ）誠（まこと）是（こゝろ）婦人（ふじん）
 ま（ま）れ（れ）ぬ（ぬ）の（の）つ（つ）つ（つ）ひ（ひ）ぬ（ぬ）の（の）嫉妬（しつと）乃（すなは）ち（ち）心（こゝろ）を（を）ら（ら）ず（ず）豈（あや）か（か）と（と）れ（れ）ど（ど）ん（ん）や（や）慎（つと）む（む）ら（ら）ん（ん）の（の）

天（てん）一（ひと）豊（ゆほう）

平林

曙草紙卷之一終

曙草紙

